

主 題：パトモス島での幻 1

聖書箇所：黙示録 1章9－13a節

これからいったい何が起こるのか？神から与えられた緊急で、かつ、重要なメッセージ、ヨハネはこの後、このメッセージをどのようにして神からいただいたのか？そのことを説明していきます。その前に再び彼は、自らのことを読者に説明しています。もちろん、そこにはすばらしい意図がありました。迫害にあるクリスチャンたちを励ますためです。その上でこの大切なメッセージを彼らは聞くようにとヨハネはメッセージを記していくのです。

A. ヨハネの人格 9a節

まず、9節を見ますが、ここにヨハネの人格を見ることが出来ます。どのような人だったのか？9節の初めに「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、」とあります。彼はクリスチャンたちの間ではよく知られていました。彼は十二使徒のひとりだったからです。彼以外の使徒たちはもうすでに亡くなっています。彼が最後に残されたのです。すばらしい霊的なリーダーであるヨハネ、彼は自分自身に関して二つのことを挙げて紹介しています。

(1) あなたがたの兄弟である

(2) あなたがたとともに与っている者である

ともに、いろいろなことに関与している者であると言います。彼は人として上からメッセージを語るのではなく、同じ経験をしている者として、その経験を分かち合っている者としてこのメッセージを記していることに気がきます。大変謙虚で思いやりのある人だったと見る事ができます。

そして、「分かち合っている」三つのことを挙げています。

(1) 苦難：「圧迫、苦しみ」という意味です。新約聖書に45回記されていますが、「苦難」と訳されている以外に「苦しみ、悩み、迫害、苦勞、困難、苦しい目、患難、苦痛」ということばに訳されています。ヨハネは「私たちは信仰者として大変な苦しみや、また、信仰ゆえの圧迫を経験している。あなたがたと同じように私も経験していると。この当時、ローマ帝国の第11代皇帝であったドミティアヌスがクリスチャンたちを迫害していました。ローマだけでなく、広範囲に亘ってクリスチャンへの迫害が進んでいたのです。この後見ていきますが、小アジア、今のトルコに存在した教会も迫害を受けていました。ですから、ヨハネは「あなたがたは大変な迫害を受けているけれど、実は、私自身も同じように迫害を経験している。」と言うのです。

(2) 御国：すでに6節で見たように神のすばらしい祝福です。主イエス・キリストを信じる者は神のご支配の中に置いてくださる、神が私たちを支配されると言います。その祝福に与っているのです。同時に私たちは、見て来たように、また、これから学んでいくように、主がこの地上にすばらしい王国を建て上げるときに、千年王国と言われていますが、そのときに、王であるイエスとともにこの世界を治めるのです。その後、私たちは主とともに永遠を過ごすのです。このような祝福に与っているのです。ヨハネは「あなたがたと同じように、私もその祝福に与っている。」と言います。

(3) 忍耐：このことばは「辛抱、ぐらつかないで忍耐して待つ」という意味です。「あなたがたがそうであるように、私も主に信頼を置きながら、主の約束を信じて歩み続けている。」とヨハネは言います。

このように、ヨハネは読者たちに「私はあなたがたと同じことを味わっている。」と伝えるのです。この三つのことば「苦難」「御国」「忍耐」は名詞ですが、面白い書き方をしています。一つの冠詞をもって三つの名詞を並べています。それは三つのことが非常に関連しているということを表わすのです。

見て来たように、私たちはイエス・キリストを信じることによって様々な困難を経験します。イエスに忠実に生きようとするほどにいろいろな辛いことを経験します。9節に「あなたがたとともにイエスにある」と書かれているのは、この苦しみの原因が信仰のゆえだということ言うのです。私たちが神に喜ばれるようにすればするほど、この世は喜びません。様々な形をもって私たちを苦しめます。使徒の働き14：22に「弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、『私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない』と言った。」と書かれている通りです。

そんなときに、信仰者として私たちを前進させるものは何でしょう？皆さんもそのような中で、涙することがあったり、辛いなと感ずることがあっても、立ち止まらずに前に向かって進んでいこうとされますが、なぜ、その歩みができるのでしょうか？きっと同じ答えが出て来るでしょう。それは「希望」で

す。この苦しみはずっと続くものではない、この大変辛い状態はずっと続くのではない、終わりが来るのです。そして、その後に神が約束されたことはすばらしい約束です。

よく考えると、パウロもペテロも、今見ているヨハネもそうでした。信仰者たちはみな大変な苦しみを経験しました。何よりも、主ご自身がそうでした。主イエス・キリストは地上において人々に歓迎されるどころか、憎まれて十字架に追いやられたのです。私たちがいろいろなことを経験する中で、もし、私たちが主が約束されたものをしっかりと見据えて生きていくなら、その希望が私たちを前へ進めていきます。もう間もなくこの地上の生活は終わるのです、皆さん。その後に待っているのは、神が私たちを迎えてくださって、神とともに永遠を過ごせることです。地上での短い生活が終わった後、私たちは主とともに永遠を過ごすのです。だからこそ、私たちは主にお会いするそのときを楽しみにしながら、この地上を歩んでいるのです。言い方を変えるなら、本当の故郷を目指しながら、そこに戻ることを楽しみにしながら過ごしている旅人のようなものです。

私はどこかに出掛けたとき、一番楽しみなときは家族のもとに戻るときです。私たちにもその日が来るのです。私たちの神にお会いする日が…。約束されたすばらしい祝福に招かれるその日が来ます。その希望をもってクリスチャンは歩んでいます。その当時も、そして、今の私たちもそうです。こうして私たちは希望をもって歩み続けていますが、それを可能にしてくれるのは「忍耐」です。確かに、希望をもっていますが、現実にはいろいろな問題が深刻になるほど、希望を失いかけてしまいます。そういうときに、私たちの心の中には「心配しなくてもいい、主を信頼していなさい。私は最善のときを知らないけれど、神はそれをご存じだから。完全なことしかできない神は完全なときをご存じで、そのときに必ずみこころを成してくださるから、信頼して生きていきなさい。」という信仰があります。

希望をもって生きているクリスチャンの皆さん、信仰生活はこのように言えますか？「忍耐を学ぶ機会である」と。毎日の生活を通してそのことを学んでいませんか？私たちは祈ったならすぐに答えが欲しいです。今、この瞬間に私たちは神の答えを求める者です。でも、私たちが学んでいることは、私たちが最善と思えるときは必ずしも神の最善のときではないということです。私たちが学ぶべきことは、その最善のときを忍耐をもって待ち続けることです。

そうしてクリスチャンたちは生きたのです。あのテサロニケのクリスチャンたちがそのように歩んでいたことをパウロはこのように言っています。Ⅱテサロニケ 1：4，5「：4 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。：5 このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。」、テサロニケのクリスチャンたちは大変な迫害を経験していましたが、その中でも彼らは希望をもって主に信頼を置いて歩み続けていました。そのことをパウロは称賛しているのです。

ですから、ヨハネは読者たちに言います。「あなたがたは大変な困難を経験しているけれど私も同じだ。あなたがたは神がくださった祝福を見て希望をもって歩んでいるが、私も同じだ。ときには、いつまでですか？という思いを抱くことがあっても、神を信頼しながら忍耐をもって歩んでいる、私も同じだ。」と。そのようにヨハネは彼らに伝えたのです。このメッセージを聞いた読者たちはヨハネに親しみを感じると思いませんか？偉い人が話しているのではない、自分と同じことを経験している人が語ってくれていると…。こうしてヨハネは自分のことをこのように述べて、大切なメッセージを彼らに伝えようとするのです。

B. ヨハネの迫害 9 b 節

さて、9節の後半を見ると、このように話した後、ヨハネは自分自身が経験していた迫害について説明をしています。「神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。」と。

1. 流刑

ヨハネは自分は流刑に遭っていると言います。「パトモスという島にいた。」と。パトモス島は小アジア、現在のトルコから西の方に沖65キロ行ったところにある小さな島です。岩石ばかりの不毛の土地で、島の長さ（南北）は16キロ、幅（東西）は8キロで三日月形をなしていると言われます（パークレー）。この島にヨハネは送られたと言うのです。実は、この当時、ローマ帝国は囚人をこの島に送っていました。私たちも「島流し」とか「遠島」ということばを聞きます。そのことに関して、スコットランドの神学者パークレーはこのように言っています。「遠隔の島に罪人を送ることはローマの刑の一つであり、普通、政治犯に科せられた。刑罰として最も重い刑ではなかったが、受刑者は市民権を剥奪され、最低生活に必要な少額の金銭を除いて全財産を没収された。流刑の地にある囚人は虐待されることなく、島の牢獄に幽閉されることもなく、限定された区域内での自由行動が許された。」と。牢に閉じ込められているわけでもなく、鎖に繋がれているわけでもなく、自由な行動ができたようです。

その島にヨハネは送られたのです。実は、このことを証明する歴史的な証拠があります。初代教会の

記録がこのヨハネの流刑について記しています。

◎初代教会の記録

・エウセビオス : 3-4世紀に生きた人物ですが、彼は使徒時代から4世紀初頭に至る古代教会の姿を記した「教会史」を書いています。彼はヨハネがパトモス島に送られた後、そこから帰って来たことを述べているだけでなく、そのことが紀元96年に起こったドミティアスの死の直後であったと、年代までも記していると、このことは元ダラス神学校のジョン・ウォルバートという先生がそのように記しています。ヨハネはパトモス島に送られた後、そこからエペソに戻って来たことは紀元96年に起こっていると記しているのです。

・アレキサンドリアのクレメンス : 2世紀、この人はギリシャ人だったと言われていますが、アレキサンドリアという名が付いているのは、エジプトのアレキサンドリアで活躍した一人の神学者だったと言われています。彼は、圧制者の死後、ヨハネはパトモス島からエペソに帰ったと記しています。圧制者とは皇帝のことです。

このようなものが残っているのです。ですから、これらのことからヨハネの流刑は確かに歴史的な事実であったと言えるのです。先に、この島で一般の囚人がどのように時を過ごしたのかを見ました。では、ヨハネはどうだったのか？先ほどのパークレーが次のようなことを記しています。「しかし、ヨハネの場合はこれとは違った。彼はクリスチャンの指導者であり、クリスチャンはすべて犯罪人と見做されていたから、ヨハネが直ちに処刑されなかったのは不思議なくらいであった。ヨハネは流刑の島の採石場で重労働を科せられた。」と、また、パークレーはウイリアム・ラムゼー卿というスコットランドの考古学者であり、また、新約の学者である人が、ヨハネの刑を想像して言ったことを記しています。恐らく、このようなことがヨハネの身に起こったのだらうと。「まず、鞭で打たれ、次に、枷を嵌められた。これは外すことのできないものであった。衣類はかろうじて体を覆える程度で、食物は乏しく、敷物もなく土の上で眠り、暗い牢獄の中で監視兵の鞭のもとで働いた。」と。先に見たこととかなり違います。一般の囚人は自由がありました。恐らく、ラムゼー卿によれば、ヨハネはまさに奴隷のような状態で大変な苦しみを経験していたのでしょう。

先ほども見たように、初代教会の伝承から、ヨハネは紀元94年パトモス島に流されて、96年に釈放されたのであらうと言われています。このような苦しみを経験したヨハネはこのとき何歳だったのでしょうか？主イエス・キリストが十字架で亡くなったのが紀元30年とすると、90年代はもう60年経っています。恐らく、ヨハネはもう90歳を越えていたでしょう。その老人がこのような苦しい目に遭っていたのです。

2. 流刑の理由

そのことを話した後、ヨハネはなぜ自分がこのような刑に服したのか？その理由を説明しています。

「神のことばとイエスのあかしとのゆえに、」とあり、これが理由だと言います。何を言わんとしたのか？

1) 神のことば

「神のことば」とは神が教える救いの真理、「神の福音のメッセージ」のことです。福音宣教のゆえに私はこの苦しみに遭っているとヨハネは言います。Ⅰテサロニケ2:13を見てください。「こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。」、

*「神の使信のことば」に注目してください。

「使信」とは主イエス、また、使徒たちの福音宣教の中核的な内容、彼らが語った救いのメッセージのことです。この新改訳聖書には「使信」ということばがありますが、原語にはこのことばはありません。日本語の聖書では新改訳聖書にだけあります。ですから、口語訳聖書では「私たちの説いた神のことばを聞いたときに」と「神のことば」と訳されています。原語に忠実です。また、文語訳聖書では「汝らが神のことばを我らより聞きしとき」と「神のことば」となっています。新改訳聖書は「神のことば」としないで「神の使信のことば」と「使信」ということばを入れています。恐らく、翻訳された方はこの箇所のことばが言わんとすることが何であるのかを理解した上で、それをより明確にしようとして「使信」ということばを補ったと思われます。

Ⅰテサロニケ2:13で言われていることは、テサロニケのクリスチャンたちはパウロからメッセージを聞いたのですが、「それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれた」、そして、救いに与っているということです。福音のメッセージを聞いて彼らはそれによって救いに与ったのです。ですから、「神のことば」とは「神の使信のことば」「救いのメッセージ」です。

2) イエスのあかし

ヨハネは「神のことば」に「イエスのあかし」を補うことによって、「神のことば」をより明確にし

ようとしています。「イエスのあかし」ということばは黙示録に何度も出て来ます。12：17には「すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。」とあり、19：10にも「そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」と書かれています。「イエスのあかし」とは「救い」のこと、神の救いのメッセージ、福音のことです。それを保っている者たち、それを信じている者たちのことです。ですから、9節で、ヨハネは「私がなぜパトモスに送られたのか？島流しに遭ったのか？それは私がこの神のメッセージを宣べ伝えたからである。」と、そのように伝えるのです。

皆さんに思い出していただきたいのですが、マルコの福音書16章、最後のところですが、イエスが弟子たちに対して大切な命令を与えました。16：15「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」と。マタイはこのように記しています。28：19-20「19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と、同じことです。どちらにしても、出て行って福音を語ることから始まるのです。パウロも言っています。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてももしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」(Ⅱテモテ4：2)。

ヨハネがなぜ捕えられて島流しに遭ったのか？福音のメッセージを語っていたからだ。マルコ16章でその命令を聞いた後、20節にあるように、弟子たちは出て行って福音を語ったのです。「20 そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。」と。イエスから命令を受けた後、弟子たちは出て行って福音を語り、そして、60数年経ってもヨハネはまだその命令に従い続けていたということです。すごい信仰者だと思いませんか？90歳を過ぎても、神からいただいた命令に従い続けていたのです。機会を用いてキリストの福音を語り続けた、それゆえに、ヨハネはパトモスに送られ大変厳しい目に遭っていたのです。ヨハネはこのような信仰者でした。

私たちはどうでしょう？福音を語っても聞かれなかったならあきらめてしまいませんか？過去にはやったけれど…と言っていないですか？天に召されるそのときまで、もちろん、ヨハネだけではありませんが、福音のメッセージを語り続けたのです。それが神の命令だったからです。その命令に彼は従い続けたのです。このことをヨハネは読者たちに伝えるのです。自慢しているのではありません。もうみな知っていました。ヨハネがどのような人かを。ヨハネは謙虚に「私もあなたがたのひとりだ。そして、私に神はこのようすばらしい祝福を与えてくださり、こんなメッセージを託してくださった。」と言います。そして、10節から、ヨハネに示された幻について、彼は説明をしていきます。

C. ヨハネに示された幻 10-16節

10節「私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。」

1. 示されたとき

「主の日」とありますが、このことばを聞くと二つのことを考えます。

- ・「さばきの日」のこと
- ・「主日」、日曜日のこと

確かに、旧約聖書には「さばきの日」と記されています。ただ、それに関して疑問があります。というのは、「主の日」が「さばきの日」を示している聖書の箇所はたくさんあります。たとえば、Ⅰコリント1：8「主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで堅く保ってください。」、5：5「このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が減ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」Ⅱコリント1：14「あなたがたは、ある程度は、私たちを理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであるということを、さらに十分に理解して下さるよう望むのです。」など、このように「主の日」が「さばきの日」と記されているところを見ると、「主」はすべて名詞です。

今、私たちが見ている黙示録1：10の「主の日」の「主」は名詞ではないのです。形容詞形です。新約聖書にはここにしか出て来ません。Ⅰコリント11：10でも「しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。」と「主の」は形容詞形ですが、ここは「主の晩餐」となっています。ですから、なぜ1：10は形容詞形なのか？

もう一つは文脈から見ます。この文脈を見ると、この後書かれていることは「地上にある教会においての主イエス・キリストの働き」です。イエスが教会の中でどのような働きをなさっているのか？そのことが書かれています。ですから、まだ「さばき」のことではないのです。ですから、この10節に書

かれている「主の日」は「さばきの日」と取るのではなく、主の初めの日、つまり、私たちが言っている「主日」のことです。日曜日のことです。ヨハネは日曜日に次のようなことを経験したと記すのです。

2. 示された方法

ヨハネはどのようにこの幻をいただいたのか？

1) 御霊に感じ：これは「御霊によってある状態になる」ということです。聖霊による特別な経験のことです。聖霊によって支配されたヨハネは、普通では決して経験できない状態に置かれたという、ヨハネは主イエス・キリストとの直接的で霊的な交わりの中に入れられた、特別なことを体験したのです。実は、このような体験をした人が数名出て来ます。

・エゼキエル = エゼキエル書 2：2「その方が私に語りかけられると、すぐ霊が私のうちに入り、私を立ち上がらせた。そのとき、私は私に語りかけることばを聞いた。」、3：12, 14「:12 それから、霊が私を引き上げた。そのとき、私は、うしろのほうで、「御住まいの【主】の栄光はほむべきかな」という大きなとどろきの音を聞いた。」「:14 霊が私を持ち上げ、私を捕らえたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、【主】の御手が強く私の上にのしかかっていた。」

・ペテロ = 彼がヨッパという町に行ったときに夢を見ます。使徒 10：9－11「:9 その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。:10 すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとり夢ごちになった。:11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。」、11：5「私がヨッパの町で祈っていると、うっとり夢ごちになり、幻を見ました。四隅をつり下げられた大きな敷布のような入れ物が天から降りて来て、私のところに届いたのです。」、彼はヨッパの町で祈っていると幻を見たのです。これは特別な経験です。

・パウロ = 彼もその経験を記しています。使徒 22：17－21「:17 こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていますと、夢ごちになり、:18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』:19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。:20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場にいて、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』:21 すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました。」、ペテロの体験とよく似ています。祈っていると夢ごちになり、主を見た。

彼らもヨハネと同じように特別な体験をしているのです。また、Ⅱコリント 12：1から、パウロは第三の天に引き上げられたことを語っています。「無益なことです、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。」、そして、4節「パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。」と記しています。そこでパウロは「私は主の幻と啓示のことを話しましょう。」と言います。彼自身が体験した特別の経験です。

ですから、ヨハネがここで言っていることは「聖霊なる神が特別に自分のうちに働き、イエスさまと直接的な霊的な交わりの中に入れられ、そして、神からのメッセージをいただいた。」ということなのです。こういう方法で彼はこのメッセージを得たということを教えます。

2) ラッパの音のような大きな声を聞いた

これはユダヤ人にとってはよく知られたことです。旧約の時代に、神がご自分の民に何かを伝えようとされるとき、神がメッセージを発するとき、また、神が姿を人々の前に示されるとき、命令が与えられるとき、いつもラッパの音をもって人々を集められたのです。

・出エジプト 19：13, 16, 19 = モーセによって十戒が与えられたとき、「:13 …しかし雄羊の角が長く鳴り響くとき、彼らは山に登って来なければならない。…:16 角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。…:19 角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えられた。」、「雄羊の角」、英語の聖書では「トランペット」と訳しています。「角笛」も英語の聖書では「トランペット」です。

・レビ記 25：9 = 「あなたはその第七月の十日に角笛を鳴り響かせなければならない。贖罪の日に、あなたがたの全土に角笛を鳴り響かせなければならない。」

・ヨシュア記 6：5 = 「祭司たちが雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、あなたがたがその角笛の音を聞いたなら、民はみな、大声でときの声をあげなければならない。町の城壁がくずれ落ちたなら、民はおのおのまっすぐ上って行かななければならない。」

・イザヤ 58：1 = 「せいっぱい大声で叫べ。角笛のように、声をあげよ。わたしの民に彼らのそむきの罪を告げ、ヤコブの家にその罪を告げよ。」

こうして、旧約の時代において、神が人々に何かをお告げになるときに、そこにはこのようなラッパの音が鳴ったのです。つまり、このヨハネの黙示録を見ると、ヨハネは御霊に感じた後「…私のうしろに

ラッパの音のような大きな声を聞いた。」と、ヨハネが言わんとしたのはまさにこのようなことだったので。主イエスによって今何かが明らかにされようとしている、ちょうど、旧約の時代にラッパが鳴って神のメッセージがあったように、ヨハネは言います。今、神が私に大切なメッセージを語ろうとしている、だから、ラッパが鳴った、そして、これから神がお語りになると。

⇒今、まさに、主イエスによって何かが明らかにされようとしていた

黙示録 1 章を見てください。神が語られたことはこうでした。11 節「その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、…」、これが神からの命令だったのです。ヨハネに命じられたことは、「これからわたしが命じることを書き写しなさい。」です。この命令は実は 12 回出て来ます。その中の一つ、10:4 には「七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があって、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた。」「記してはならない」とありますが、後はすべて「記しなさい」と書かれています。

◎ヨハネに告げられた命令

5:2, 12 = 「2 また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と言っているのを見た。」「12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

6:10 = 「彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

7:2, 10 = 「2 また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。」「10 彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」

8:13 = 「また私は見た。一羽の鷲が中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」

10:3 = 「獅子がほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した。」

11:12, 15 = 「12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。」「15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

12:10 = 「そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」

14:2, 15, 18 = 「2 私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。」「15 すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」「18 すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」

16:1, 17 = 「1 また、私は、大きな声が聖所から出て、七人の御使いに言うのを聞いた。「行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」「17 第七の御使いが鉢を空中にぶちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した」と言った。」

19:1, 17 = 「1 この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」「17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、」

21:3 = 「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、」

これが神からのメッセージでした。ラッパが鳴り響き、そして、神のメッセージが届けられたのです。「ヨハネよ、わたしがあなたに示すことを書き写しなさい。」と。そして、その幻を記した書物をどのように用いるのか？そのことまで書かれています。11 節の続きに「七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」とあります。すべてはエペソから始まり、北に向かって行きます。スミルナに、その後、時計回りに回って行きます。これらの教会にこれを送るようと言われます。

なぜ、これらの教会が選ばれたのか？その他にも町はありました。でも、これらの町はそれぞれの地域における主要都市だったからです。人が多く集まっていたのです。敢えて、これらの町が選ばれたのです。これがヨハネに告げられた命令であったと。

3. 示された幻 12-16節

さて、12節から16節まで、示された幻が書かれています。ヨハネが見た幻です。実は、ヨハネは4回幻を見ます。一回目が今見ているところです。2回目の幻は4章から16章に出て来ます。3回目の幻は17章から21章8節まで、4回目の幻は21章9節から22章5節までです。この四つの幻をヨハネは見るのです。その一つ目がここに記されています。12節「そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。」、私に語りかけるものがだれなのか？と、ヨハネは振り向いて見ようと思いました。そして、そこに見えたものは「七つの金の燭台」でした。

1) 七つの金の燭台

「七つの金の燭台」とは何のことでしょう？1:20を見てください。ここに説明があります。「わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。」、

(1) 教会とは

ですから、ヨハネが見た最初の幻「七つの金の燭台」は「七つの教会」のことです。この「七」という数字は完全数です。このメッセージは特定の七つの教会だけでなく、あらゆる時代のあらゆる地域に存在したすべての教会に対するメッセージでもあるわけです。ですから、今見たこの七つの教会に限定されるのではないのです。すべての教会に対するメッセージ、それを私たちはこれから見ていきます。

(2) 教会の価値

また、ヨハネが見た幻は「教会の価値」というものも教えています。というのは、この燭台は「金」できていたとあります。金は最も価値のある金属です。ですから、教会の価値を表わしているのです。主イエス・キリストの救いに与った者たち、私たちクリスチャンです。こんな私たちが神の前に価値があるのか？イエス・キリストは私たちのためにご自身のいのちを捨ててくださった、それほど価値があると、そのように見てくださっているのです。私たちは自分を見て、どこにそのような価値があるのか？と思います。でも、神は喜んでいのちを捨ててくださった。ですから、ここにもその七つの燭台は金であると、それだけ主の前に価値のあるものだと言うのです。ですから、私たちを見て神はご自身の栄光を現わそうとしておられるのです。神は大変な代価をもって私たちを救ってくださった。それだけの代価を払って買い取った私たちにとってそのような価値があるのか？神は私たちを通してご自身の栄光を現わそうとしておられるのです。尊い存在だからこのような働きに用いようとしてくださっているのです。本来、私たちクリスチャンはその目的のために生きているはずですから、その目的のために用いられるはずです。

見て来たように、ヨハネがそうであったように、私たちがすることはこの地上にあって私たちの神の偉大さを示すことです。私たちを変え続けてくださっている神を私たちを通して示すのです。罪の赦しとはどういうものか？神が示してくれた愛とはどういうものなのか？それを私たちが示すのです。それによって人が見ることの出来ない神を人々の前に明らかにしていくのです。私たちはすばらしい役割を得ているのです。

(3) 教会の役割

どうして教会を燭台と言われているのでしょうか？燭台は辞書では「ろうそく立て」と書かれています。彼らはろうそくを使ったわけではありません。オイルランプです。オイルを燃やしたのです。しかも、移動するので可動式の燭台です。そのように教会は燭台だと言われたのは教会の役割を明らかにしたのです。私たちの教会、また、教会を構成しているクリスチャンであるあなたの役割は、この神のすばらしさを世に証することです。今、見て来たように、神がどのようなお方かを人々に示していくのです。当然、私たちの努力ではできません。神があなたを使ってくれるのです。あなたが主に従い続けていくときに、神はあなたを喜んで用いてくださる。それほど価値のある存在である私たち、もし、私たちが喜んで用いてくださいと自らを委ねながらいくなら、神は私たちを使ってご自身のすばらしい栄光を現わされます。だから、あなたは、教会は燭台だと言われるのです。価値があるから金の燭台だと。

◎教会はだれに属しているのか？

13節から、もう見る時間はありませんが、「それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。」と、最後に私たちが覚えることは「教会はだれに属しているのか？」ということです。だれの持ち物か？人の子、主イエス・キリストのものです。神のものです。だから、私たちは神が何を望んでおられるのか？神は何を喜ばれるのか？を考えるべきです。神のみこころを求めて教会は運営されるのです。個人のもではありません。神のものです。みことばに従って私たちは生きていく、みことばに基づいて教会は運営されていくのです。

ヨハネはこのようにして幻を見たと言いました。今日、私たちはヨハネについて少し新たなことを見て来ました。大変な信仰者だったと。信仰者はある面でリタイアはありません。天に上がるまで私たち

はキリストの証し人です。天に上がるまで神はあなたに必要な助けを与え、キリストの証し人として用いてくださるのです。ですから、皆さん、この一週間、様々なところでキリストの証を、神の助けをいただきながら為してください。そのことを神はあなたに命じておられます。そして、それを実践できるようにと必要な助けを備えてくださっています。

燭台であると、キリストを証しなさいと、どうぞ、その証し人としてこの一週間歩んでください。

《考えましょう》

1. 「苦難」に打ち勝つために必要なものは何でしょう？
2. 「忍耐」を成長させるためにはどうすれば良いと思いますか？
3. 「金の燭台」が意味することは何でしょう？
4. 「燭台」である教会に与えられた役割を説明してください。